能と連句

奥村富久子

今はもう六つ昔。戦後初めて女性の能楽師が誕生し、その一期生となった私は未だ二十代で、同期生の中では最年少であった。

その頃は何処へ行っても若手であったのに、今はかぞえて八十八才。米寿とは我ながら夢の様である。

その夢物語りをふり返ってみると、道成寺を披いたのも関西では女性として最初で、珍らしさから多勢のお客様が、立ち見が出る程に来て下さったが、私も三十代の最も意欲に充ちた頃であった。

鐘後見に先代喜之先生(観世)。お地頭に初代梅若猶義先生。お後見に先々代観世鉄之丞師と、もっていない程の方々にお付き合いいただき、恵まれた披きであった。

この三年前に同じ大槻能楽堂で道成寺を披いていた夫の南條秀雄は、喜之先生と共に鐘

後見の座に居て、祈る様に見つめてくれていたのを覚えている。

鼓は夫の親友とも思う大倉長十郎師が勤めて下さった。

緊張の極みの中に、乱拍子。鐘入りも怠なくすみ、揚げ幕に跳び入った時には、ともかくも人生の半ばを無事に了えたとの思いが、胸を浸した。

その折に、楽屋を訪ねて「よかった。よかった。」と満面に笑みをたゝえて喜んで下さった

谷崎潤一郎先生の温顔は今も鮮やかである。先生は私共の結婚の時。能楽師同士の結婚は前例が無い事として、師家をはじめ嵐の様な反対の中を、媒酌までして私達を護って下さった大恩人である。また時の新聞に私共の結婚に深い御理解と温情溢るゝお言葉をいただいた新村出先生の御厚志も忘れられない。

その後。様々な方々のお援けによって、自主公演「玉響会」(谷崎先生命名)を重ね、いつか二十五年の歳月が流れて、銀婚記念能。そして

「老醜をさらさず有終の美を」との南條の主旨で「散る花の会」を年二回、東京と大阪で催すことになり、私達は一番一番を精魂を傾けて勤めた。その散る花の会で私の舞を市賢になった。

静岡大学教授の宗片邦義先生が、「これはイギリスの人達にも必ず解かる」とおっしゃって、ブラント教授とのお話しが出来上り、翌年の春（昭和五十八年）英国公演となった。

南條を団長として二十余名。その折に大倉長十郎師が大そう喜んで下さり、「もし費用が不足なら飛行機代を自身で持ってもいいから」とまで言っていたゞいた御厚情も嬉しく忘れ難い。

ロンドン・サドラーズ・ウェルズ劇場は千八百席。折からの日本ブームで満席の上、キャンセル待の行列が長かったと言う。

女性の海外での演能は初めての事である。女性に対する偏見は無いお国柄ではあるけれど、もし気に入られなくて両教授のお顔をつぶす様な事があってはと、心配したけれど、

開演と同時に会場は水を打った様に静まり、やがてハンカチを眼に当てる婦人さえあって、正に芸術に国境なしの感となった。

それもこれも、宗片先生の名訳があり、マネージャーをつとめて下さった東さんの御苦労が、あったればこその結果であった。

三十代半ばの若さで、大変きびしい方と聞いていた劇場主任のレミントン氏も、会後のパーティーで、「劇場がいっぱいになったのも嬉しかったが、大変佳いものを観せていたゞき嬉しかった」と御あいさつがあり、他の観客の方々も次々に握手を交して「感動しました」と言って下さって、私達もほっと肩の荷を下した思いであった。

春竹下異国の友の優しさよ　富久女

また翌年もと言うお話しになり、今度は南條の「恵」重荷」も演じることになるとって、私も前回よりも少しは気持が楽になった。

昭和五十九年再度英国公演。花束を抱えて出迎えて下さったプラント先生や他の方々。

米語ではなく旧い英語の南條の発音が良いとかで、いろいろ話しかけて下さると、互ちま
ち解らなくなり、「ノー、ノー。アイラヴユー
オンリー」と手を振って皆様をどっと笑わせる
一幕もあった。

幸いに五日間の連続公演も好評をいただき
満足して帰国することが出来た。

帰国後間もなく松子夫人をお招きして、谷
崎潤一郎先生生誕百年記念能を国立能楽堂で
、市殿場での「するが能」。秋には大阪で才十五
回数る花の会。「求塚」を舞ったのが南條の最後
の能となった。昭和六十年。享年六十四才。
心筋梗塞と言う思いもよらぬ急逝であった。

幸せが大きければ大きい程、その落差は深
く、暗闇の慟哭は、その体験の有る人でなく
ては、とうてい分って貰えるものではない。
唯々あとを追うことだけを考えていた私に
、子供達は一周忌までに自分史を書き上げる
ことをすすめた。

毎日五枚、十枚と原稿を書き溜めている中

に一年が巡り、皆様方のお力添えによって自伝「花のむかし」を上梓することが出来た。

その後は、レイモンド・ムーディー著の「かいま見た死後の世界」。キューブラー・ロスの「死後の真実」など臨死体験の書。仏教書の数々。聖書等々。すがる思いで読み漁った。

十年の暗闇を経て、いつか私の胸に故人との再会の思いが確かなものとなっていった。

近頃はほんとうに自然に逢えない筈はないとの思いが胸に満ちている。

無限ではない、有限の待時間を、故人を悲しませることの無い様に生きて素晴しい再会を果したい。そんな思いが身に添った頃、私は連句に巡り会った。芭蕉で知られる俳諧連歌である。

実人生では一途に不器用に生きて来た私であるけれど、舞台上では、楊貴妃、式子内親王。本都婆小町、弱法師。遊女、鬼女とも化して長の年月を過ごした身に、せめて舞台上の死を共にと能を舞い納めた今は、自分の

こころのみを詠む短歌、俳句ではもの足りず、自由自在に変身して空想の世界に遊べる連句が、何よりの慰めとなった。

さて憧れの彼岸へ渡った折には、この楽しい連句を得々と夫や母に伝授し、失に招かれた晨友諸氏をもお誘いして遊べたら、どんなに楽しいことであろうか。

連句には能と共通する点も多い。能の抑制した演技は、その余情を見所の人それぞれの想像にゆだねるが、最も短い詩の五七五の句は余情を残し、それを受けて次の付け句をすると言う、二つのものが結ばれて一つの世界が生れる点で、能と通うものがあり、序破急の流れや花を大切にする等、いろいろ相通うものがあり私には親しみやすく嬉しく感じられた。

能を勧めていた頃には、軽く考えていた素謡仕舞を、今は体力に適う技として、墨絵の様に楽しんでいる。

今生に於ては二度の英国公演が、最後の大

きな思い出となったが、彼岸に渡った折は、
また夫と共に輝く舞台に立ちたいと思う。
今のまゝではなく、女性の得性を生かした
演技を考えたいとも思っている。
こんな風に考えると彼岸への旅立ちも、ほ
んとうに楽しい。
その楽しみを、より楽しくするために、今
生の余生を、こころ豊かに学んでゆきたいと
思っている。
その再会の時、母にはいっそう素晴しい娘
に、夫からは再びプロポーズされる程の女性
に、旧知の皆さんからは笑顔で迎えられる様
に、残る日々を大切に過ごしたいと希ってい
る。